

前仮説段階を強調した自由研究とその支援のためのMIの可能性

○富永 岳 村上忠幸
○Takeshi TOMINAGA Tadayuki MURAKAMI
oranje 京都教育大学

【キーワード】探究学習、自由研究、前仮説段階、資質・能力、マルチプルインテリジェンス

1. はじめに

oranje（オラニエ、京都市内の学習塾）では、小中学生を対象とした「自由研究でまなぶ場」をつくっている。ここでの自由研究は、例えば夏休みに象徴される一過性の実験活動ではなく、大学生が取り組む卒業研究等の類に近いものであり、テーマや問いに高い個性をもったものを意味する。昨今探究学習についてさまざまな議論がされているが、本自由研究もその一環と捉えられたい。村上はその探究学習において最も重視している過程を「前仮説段階（村上、2019）」、つまり問い探しであると、そこから始まり、自由試行として成立するものを探究学習と呼んでいる。しかし、個別の探究学習（自由研究）において、その個人が情緒的にどういった過程を経ているかということに関しては、探究学習の場づくりの実践者として不透明であるという実感があり、探ることとした。

2. 自由研究に取り組む児童の情緒的過程

自由研究は各自テーマを決めることから始める。このとき支援者は「なにがすきな？」と問いかけ、「すでに普段からやっていること」や「そのとき頭に思い浮かんだ『なんとなく』すきなこと」をテーマとして決定している。当初テーマ決定において「没頭しているもの・こと」をイメージしていたが、後の児童の活動実態において「なんとなく」で始まるのが情緒面において重要であることが示唆された。社会的に意味のあることや、自由研究のテーマとしてよくあげられるものを選ばせず、「すきなこと」にこだわるのは、そもそも主体的であるがままのすがたで取り組めることができる最適なテーマであるからである。次から、テーマが決まった後の個人の活動の情緒的な実態を示していく。

① 思いつき

児童らは、テーマが決まった後、「思いついたことを順番に」活動していく。このとき、前後の活動の文脈は意識されず調査や実験にもつながりが見られない。なんとなくす

きなものからはじまる象徴的な活動だと言える。

② 葛藤

「なんとなく」はじめているため、多くの児童から「やることがなくなった」といった発言が多発する。テーマに対して不満があったりするわけではなく、「続けたいけど、なにをすればいいかわからない」状態である。探究的なまなびの場づくりとして、支援者によるコーチングや省察により「深さ」を求めながら忍耐強く活動を続けていく。

③ こだわりや愛着（資質への気づき）

②のフェーズを越え、改めてこだわりや愛着へ気づく場面に到達するが、これがいわゆる「資質への気づき」としてメタ的な省察の達成点ではないかとみている。

この後、さらに対象を深める活動として対象を絞った活動を行い「解くべき問い探し」に迫っていくすがたがダイナミックに捉えることができる。

3. 自由研究の支援と今後の課題

①～③の情緒的な変化は、村上らによってマルチプルインテリジェンスMIを用いて形成された小集団による探究学習においても見られているが、個人の探究学習においてはまとめられていない。筆者はここに注目し、支援について考えてみた。つまり、愛着やこだわりを「資質への気づき」と捉え、その資質を「心地よいと感じる場面」とすることで、「問いへ向かう支援」以外の支援に着目することができた。今後、MIを「心地よいと感じる場面において発揮する能力」と考え、主体者が省察的にその能力をメタ認知できる支援の方略を考えていくことが課題である。

4. 参考資料

村上忠幸（2019）自由度の高い協働的な探究学習による「深い学び」の実現に向けて。理科の教育, 68（7）,pp9-12.